上司の景保は息子のようなもの

高橋役所出火ときいて　文化一〇年（一八一三）二月二三日、九州第二次測量中に、暦局内にある忠敬の上司高橋景保の役宅が全焼した。火事は二二日の深夜の九つ半（一時頃）、物置から出火した。

物置には炭俵などが詰まっていて焼け音が聞こえず、景保が気づいたのは、火が屋根に突き抜けてからだったという。消火はとても無理だった。火の廻った離れにかけ込み、父至時（よしとき）の書物三箱を取り出し、寝所に廻って雨戸を破り、ラランデ暦書を持ち出そうとしたが火につつまれていて不可能だった。頭髪に火がつくまで猛火と闘ったが力が及ばなかった。火急のことなので、近所や御長屋からは誰も出てこなかった。ただひとり、下役の吉田栄六郎が來たので、二人で蘭書（らんしょ）を取り出そうとしたが果たせなかった。

泊まり番は柴山、浦野、相沢の三人だったが、三人で役所の垂球（垂揺球儀か）、御目鏡、地図、御用書物少々を持ち出すのがやっとで、再び屋内に入ることはできなかった。御書籍、旧記、その他御道具類の多くを焼失してしまった。景保の書斎には少しも手をつけられず、数年かかって作成した資料などがすべて焼けてしまった。

景保は、災難とはいいながら、上司、同役はじめ、貴方や間（重富）、泉下の亡父に対し、全く面目ないことです。他家への類焼はなく、御長屋一統は無事で、家内は子供を抱いて出たので別状ありません。その点は御休意下さい。出火後、いろいろ考えたが、役宅から出火し道具類、ことに大切な蘭書（ラランデ暦書）まで焼失したので、世間へは面目がなく、再勤はむずかしいので、遠慮のうえ引きこもって退役しようと決心しました。跡は弟の助左衛門に譲りたいので、内々、縁者と大槻玄沢（おおつきげんたく）へ

依頼して、堀田摂津守へ申し上げてもらったという。

ところが、三月二日になると、縁者・朋友たちが揃ってやってきて、退役はかえって不忠不孝である、この罪をつぐなうには、これまで命じられている仕事はもちろん、そのほかのなすべき仕事に精を出すべきであると意見をされる。堀田摂津守からも、大槻玄沢、布施、秋山（ともに奥右筆組頭　おくゆうひつくみがしら）をとおして説諭された。

そんな経緯で景保は出火という、とんでもない不始末をしながら、処分は二〇日間の遠慮という大変軽いものだった。幕府としては、まだまだ景保に期待する多くのものがあったということであろう。

そのあとに景保は、忠敬に対して延々と子供のようなボヤキを書き送っている。出勤するために必要な、裃（かみしも）、大小、挟（はさ）み箱、衣服、下着まで新調しなければならないとか、申し訳ないが預かっていた忠敬への扶持のお金は、置場所をほかの金と分けていたため、家内が持ち出すことができなくて焼いてしまった。焼跡から少しは掘り出したが足りません。坂部の預かり金は持ち出しました、などと続く。

役宅再建のための普請は、幕府の作事方がやってくれるが、それだけでは狭いので、自弁で建て増ししたいが、六十両もかかるそうで、お金が無くて破産状態です。長年苦労した満州文字の著書三〇巻は灰になってしまった。忠敬が長崎にいったときは、オランダ語辞書、ラテン語辞書を探してほしい、などと綿々と連ねている。高橋役宅出火の第一報を送った二五日付けの吉田栄六郎の手紙を受けとった忠敬は、娘の妙薫に次のような内容に手紙を出している。内輪の通信なので忠敬の本音がよく出ている。

高橋氏は、しばらくは「御差控え」ということになるだろう。高橋役所は上司のお覚えもよく、暦局に四人いる天文方の役所の中で第一番の役所になっている。ほかの役所の妬みもあるようだし、高橋氏もや

り過ぎるように聞いている。書状のたびに、へりくだり、態度を慎むよう申してきたのだが、満つれば欠けるという諺のようになったのは残念である。江戸にいれば、なにかと協力できるが、遥かな遠国ではやりようはない。せめて火事見舞いとして一〇両を差しあげます。毎月いただいているお扶持のなかから金一〇両差し引いて、普請の足しにでもしてもらって下さい。前車のくつがえるは、後車の戒めでもあるから、本家の火の用心を心配して欲しいと述べている。

しかし、お扶持のお金も燃えてしまっていた。忠敬は高橋が出すぎるため、周囲から強く恨みを買っていた可能性を指摘している。放火だといわんばかりである。景保はたしかに才子であったが、人間的な面でいろいろ問題があったようである。

この手紙のあとに有名な「我等幼年より高名出世を好み候えども、親の命にて佐原え養子となり候間、好む所の学問もやめ、云々」の文章が続くのである。景保の不始末を聞いて、親子ほど歳のちがう上司に対し、しょうがないな、との思いが強かったのだろう。

景保より淋疾の悩みを聞く　景保は旅先の忠敬に身辺の些事をこまごまと報せている。あまったれている感じでさえある。忠敬には、やり手の景保から、親父と慕われる何者かがあったのであろう。ここに書く淋病（りんびょう）の悩みを告げる報せは、上司ではなくて親父への内緒ごとの相談である。

景保は次のように述べる。一二月二〇日（文化九年）から、ふと淋疾が出てだんだんひどくなり、二三日には痛が甚だしくなって昼夜続き参ってしまった。そこで、漢方のドリュシスという強い薬を使ったところ快方に向かい、痛みも減りました。それでも膿（うみ）は出ます。強い薬のためか、口中は腐乱し、正月元日から五日までは絶食同様で、粥の湯だけすすっていました。あまりひどいので薬をやめたところ、時々寒熱が出ます。痔も悪くて悩んでいます。これも淋病から出た病気のようです。

景保は女遊びも大好きだったといわれるが、激痛があり、膿が出るほどの重症の淋病に困っていた。強い薬を用いたところ、痛みは引いたが副作用で口中が腫れ、食事が食べられなくなる。気力が衰え、歩くこともできなくなっていた。

そんなところへ、二九日、馬場佐十郎（ばばさじゅうろう　　）に松前に行けとの命令が出る。なんの御用かわからないし、手続きとか手当てのこともあるので、病中の苦痛をこらえて駕籠で奥祐筆の布施宅まで行って事情を聞き、翌日は書類を整えるため一日中書き物をする。馬場はロシア語は達者ですが、ほかにも内々の御用があり、年若なので老巧な者一人を差し添えたほうがよいと思い、足立左内（さない）を正月二日に推薦しておいたところ、翌三日には命令が出る。この御用の打合せのため、無理にでも登城するよう堀田摂津守から指示があったが、出勤できずに日延べをお願いして、ようやく七日に出勤する。摂津守は直ぐ御逢い下さって、詳細な御用の内容を承った。

翌八日は足立左内のお暇乞（いとまごい）いの日なので、付き添いとして登城し終日殿中におり、冷えたせいか、その夜から淋疾が再び激しくなって難儀をしました。その後も度々無理して登城したので、とにかく全快しません。しかし、佐十郎、左内の二人は正月二八日に出発しましたので、まず安心しました。

こんな内容の記された手紙が延々と続いている。上司からというよりは、息子から親父へのあけすけな報告である。忠敬は、まるで若い上司のよろず相談承りである。才子だった景保が、ここまでぶちまけて相談できる、たより甲斐のある人柄だった。